段物　那須の与一　口説き

那須の与一と　云う武士(さむらい)は
積もるお歳や　十六歳で
背は小兵で　ござ候えど

小兵ながらも　弓引きゃお上手
弓は一手(ひとて)に　名は万世に
残し置かれた　処はいづこ

四国さぬきは　屋島の沖で
源氏平家の　おん戦いに
平家方では　沖なる舟に

的に扇を　しるして通る
それは源氏を　侮る(あなどる)手だて
大将義経　それ聞くよりも

あれは源氏を　侮る(あなどる)手だて
あれを射落とす　味方はないか
そこで与一は　御前(ごぜん)に呼ばれ

与一あれ見よ　平家の者は
的に扇を　しるして立てる
あれは我等を　侮る(あなどる)手だて

そなた一矢(ひとや)で　あれ射落として
敵や味方に　見物させよ
与一答えて　御前を下がる

家へ帰りて　我が住む室で
上に緋縅(ひおどし)　稚児鎧(ちごよろい)着て
弓は重籐(しげとう)　切生(きりふ)の矢にて

青の名馬に　五色(ごしき)の手綱(たづな)
波打ち際にと　早や乗り着ける
沖の舟をと　眺めて見れば

波は高くて　ゆらゆら揺れて
的の扇が　定まりませぬ
そこで与一は　一心不乱

南無や八幡　那須明神よ
射させ給えと　心願かける
神の威徳か　与一の運か

風も治まり　波小さくて
的の扇が　定まりまする
そこで与一は　神礼すまし

弓は重籐(しげとう)　切生(きりふ)の矢にて
要元(かなめもと)より　三寸下に
ねらい定めて　はっしと放つ

放つ矢すじは　虚空を切って
要元をば　はっしと射切る
切れた扇は　ひらひらひらと

波の間に　舞い落ちまする
そこで平家は　船端(ふなばた)叩く
源氏方では　箙(えびら)を鳴らす

弓は一手(ひとて)に　名は万世に
那須の与一の　まず物語り
千秋万歳　まずこれ迄よ

段物(だんもの)　＝

一般には、一貫した筋のない寄せ集めの小唄を端物（はもの）と
いうのに対して、一段として筋のまとまった長篇音曲を段物という。

重籐(しげとう)の弓　＝

弓の束(つか)を黒漆塗りにし、その上を籐(とう)で強く巻いたもの。
大将などの持つ弓で、籐の巻き方などによって多くの種類がある。
正式には握り下に二十八か所、握り上に三十六か所巻く。

切生(切斑・きりふ)の矢　＝

鷲(わし)の尾羽を用いた矢羽根で、白と黒のまだらがあるもの。
まだらの大小や濃度によって大切生・小切生・薄切生などがある。

箙(えびら)　＝

矢を入れて背中に負う矢具の一種。平安時代以降武家が用いた。